

「しょうがい学生としょうがい学生支援サポーター
及びボランティアにおける防災訓練実施と個別避難計画の作成—講義編—」

日 時： 2018年6月25日(月)5限 16:20~17:50

場 所：14号館1階1412教室

講義内容

主旨説明：インクルーシブ学生支援センター長挨拶

タイトル：「自分の避難計画は自分で作ろう」（担当：吉村千恵氏）

：「個別避難計画を作成した経験から」（担当：昨年参加したしょうがい学生さんたちから各グループ内にて報告）

対 象 者：サポート利用学生およびサポーター・ボランティア学生、教職員

参加者：しょうがい学生9名 職員5名 教員1名 サポーター2名 ボランティア2名
グループワークの様子



「しょうがい学生としょうがい学生支援サポーター及びボランティアにおける
防災訓練実施と個別避難計画の作成—実技・避難計画書作成編—」

日 時：6月27日(水)9時00分~17時50分

場 所：117C・図書館2階201室

対 象：しょうがい学生支援サポーターとサポート利用学生及びボランティア、教職員

内 容：参加者：しょうがい学生9名 職員4名 教員0名 サポーター2名 ボランティア22名

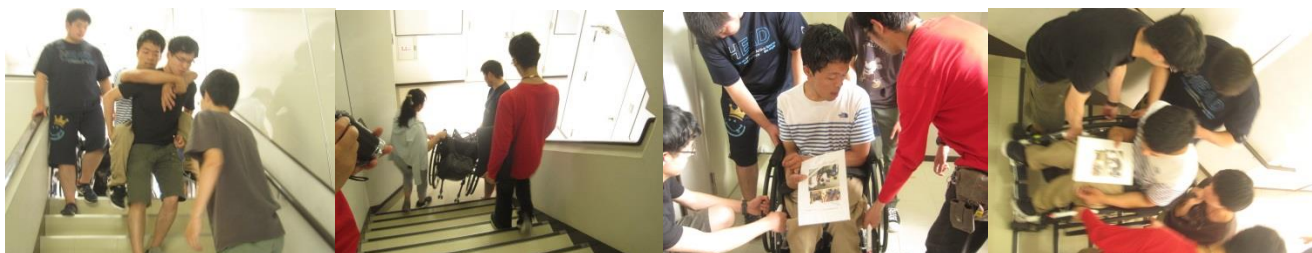
■班ごとの感想

【A班】

・車いすを全部抱えて降りるのは負担がある。地面に後輪をつけて降りれると良い。

⇒地面に後輪がついていることは、当事者の人たちも安心。

改善点⇒おんぶは、背負ってくれる人と一体になるので、多くの指示を出さなくてもよく、混乱が少ない。車いすを先におろしてもらい、後から自分がおんぶをしてもらい降りて行く。



【B 班】

- ・司令塔の役割をしたが、持ってもらう人の力が人によって違いバランスがとれていないようで怖かった。



【C 班】

- ・周辺の状況や避難者(支援者含む)全体を見ることが出来る為、指示は最初に決められた指示者がすること。
- ・荷物が多いため最小限に必要な物は小さなバックに入れておき、避難する際の荷物はそれのみを持っていく。



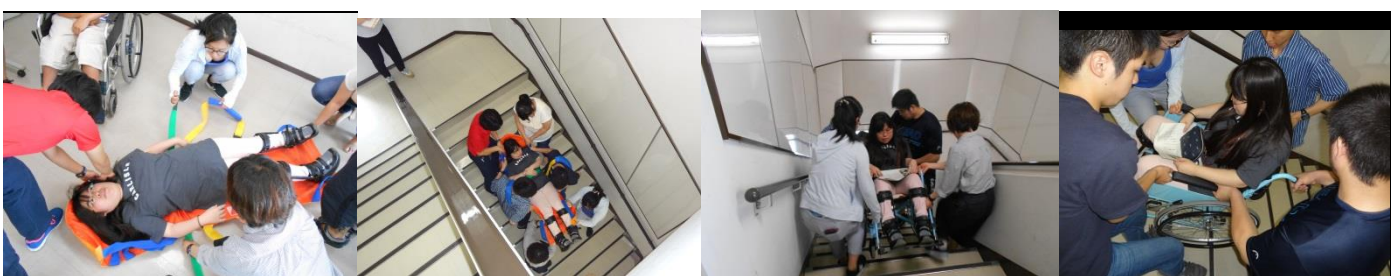
【D 班】

- ・おんぶと担架で避難してみたが、担架の方がよかった。担架で移動する場合は、背中のかすきの位置が持つ人には重要なので、避難計画書には背中のかすきの位置を載せておくとよい。



【E 班】

- ・担架と車いすで避難をした。車いすで避難する場合、女性が半分だと持ちにくく難しいと感じた。だが、担架であれば重さが分散されて車いすよりかは、きつくないという意見があった。
- ・布製の担架でもしっかりしていたことにびっくりした(本人談)。
- ・一緒に移動してくれる学生たちが声掛けをしてくれたことで安心感があつた(本人談)。
- ・ボランティア学生からは、「運動部系の学生を頼るといい。責任感もわりかしある」とアドバイスをされていた。希望する避難方法としては、①は担架で②に車いすでの避難としたい。



【F 班】

- ・手すりを持って歩いて移動したいと本人からの希望あり。実際に降りてみると(7階から6階)3分程度で降りる

ことができた。だが、例えば7階から降りるのであれば30分はかかることになる。したがって、歩いて降りる階数は、本人及び同行する支援者のことも含み今後要検討。

・はじめて手動車いすで降りてみた。多少、揺れたが思ったほどではなく「これで助かればいいな」と思った。
(本人談)



【G班】

・速さより安全性を重視する。



【H班】

・本人を抱えて降りることは不安だったが、思っていたより安定感があった。実際にやってみると、そこまでの恐怖心はなく実行できた。



【その他の感想】

・ボランティアメンバーで担架に乗った人⇒初めて担架に乗った。人はたくさんいた方が、抱えてもらった時に安定すると思った。身体が上か下かにずり落ちそうな感じがかった。

・ボランティアメンバーで担架を抱えた人⇒抱える前のイメージは「重い」と思っていたが、みんなで抱えると重くはなかった。ただ、降りやすさなどの効率を考えると4人がベストだと思った。また、息もあわせやすかった。後は、交代要員がいて先に降りた人が指示をしてくれるとスムーズに避難できると思った。

・降りる時は、慎重に移動する。早すぎず遅すぎず自分も相手に気遣い、「後、残り何段だよ」等、声をかけたりすること。

・車いすで後ろ向きに降りる時は、肩で担ぐ型もありだと思った。しかし、実際には手元がおぼつかず自分も怖かった。

・階段を歩いて降りるだけでも息があがった。日頃の運動不足を感じた。

・車いすで避難する際に、握ってもらう部分にマスキングテープで印をつけておくと分かりやすいし率先して協力したいと思う。

・非常時は、率先して避難に協力したいと思った。

- ・ どうすれば、早く避難できるかをと考えたが「声掛け」は重要だと感じた。
- ・ 最初は、安全に避難することは難しいと考えたが、案外できるものだったと思った。
- ・ 本人を抱えた時に密着していると安定感があると思った。



【吉村氏より】

- ・ 車いすで降りる場合、座位の保持が難しかったり、身体がずれる場合はより安全のために付属品であるベルトの購入を(個人)検討してもよいのではないか。
- ・ 車いすで持てはいけない箇所には印をつけておく。(フットレスなど)
- ・ 避難の中心にいるのは当事者であるが、移動する際は必ず声掛けをすること。(階段を降りるさいの1・2などの声掛け)
- ・ 男性2人で車いすに座っている人を移動するには、いくら力があってもリスクがある。特に階段は傾斜も建物によって違いがある。リスクを分散させる為にも4人の方がよい。(人数が多すぎても身体があたって移動がしづらくなる)。
- ・ 個別の避難計画書は、必ず自分でも持つておくこと。

【総括】

今回の避難訓練では、1年生を除き3年生と4年生は昨年作成したものから新たな避難方法を経験し避難計画書に加筆、修正を行った。4年生にとっては4度目の防災訓練だったこともあり、これまでの経験などをもとに新入生へアドバイスをする場面も見られた。1年生は、本学でははじめての個別避難訓練となり、いくつかの避難方法の中から試行錯誤しながら選び実施したことで、自己のしょうがい特性を改めて知る機会となった。ボランティア学生も、個別のしょうがい状況に応じた避難方法が必要であることが分かり、しょうがい学生と支援者の双方が安全に避難できることを念頭に訓練が実施できた。これは有事の際の何よりの備えになると思う。また、吉村氏の提案でボランティア学生にも車いすや担架に乗ってもらい実際に階段を降りてもらった。しょうがい学生が避難をする時に、どのような不安を抱え身体を預けることになるのかを体験してもらいたかったからだ。ボランティア自身が経験することで声掛けによる安心感、その重要性を知り得ることができたと思われる。さらに、力がない人には指示や安全確認という役割があることも分かり、それぞれができる範囲で協力することが支援者であることを学んでもらえたと感じた。

個別避難計画書の作成では、「しょうがい学生と支援者の双方が分かりやすいものであること」に視点を置き、グループ内で意見を交わしながら作成した避難計画書には、個々でいくつかの避難方法を提示することができた。今回は、しょうがい学生とボランティア全体で活発な議論、質疑応答も行いしょうがい学生の避難に関して理解の促進と学生間による協力関係の構築につながったのではないかと考える。